（月曜日）　中国新聞　H20.11.17.(月)

命への慈悲 支えに診察

小児科医師　駒沢勝さん

地域医療に道を開く

わたしと親鸞

「岡山市の国立病院で二十二年間、白血病などの子どもを治療してきたが、たくさんの死を見ましたね」。現在、備前市で小児科診療所を開く医師駒沢勝さん(66)は、先端医療の現場でどうしようもない無力感に悩んだ。

医師になりたてのころ、七歳の女の子から治療中に「『早く治して』『やぶ医者』とののしられて…。相当苦しかったのだろう」。それでも最期の言葉はあえぎながら「先生、ありがとう」だった。胸がえぐり取られるような気持ちだった。

「もっと努力しなければ」と、新しい治療法の習得に懸命になった。しかし、医学に次第に限界を感じるようになった。

「そのときずっと反発していた宗教や念仏が、どっしりとした山のような、確かなものに見えた」

三次市の農家に生まれた。父母は熱心な浄土真宗の門徒。母はよく「勝よ、これをしてくれ」と両手を合わせた。仕方なく「ナムアミダブツ」と唱えたが「あほらしい」と心の中で反発していた。それより科学的な思考の方が納得がいき、よほど頼りがいを感じた。

一九六八年、岡山大医学部を卒業し、国立岡山病院（現・国立病院機構岡山医療センター）小児科に勤務。大変な毎日だった。治療法が今ほど発達しておらず、一年に八十一人も子どもが亡くなったこともある。

白血病のわが子に付き添っていた母親が「この子が死ぬ直前、自分の血を輸血してほしい」と言った。「せめて体の一部でいいから、一緒に死にたい」という思いだった。その日、母親はそっと腕を差し出した。駒沢さんは「涙が止まらなかった。今、思い出しても…」と声を詰まらせた。

「将来、医療技術が進歩して同じ病気の子どもが助かるようになったとしても、今、目の前の子が助からなかったら何も解決しない。科学の進歩とは結局、問題をすり替えているだけではないのか」

迷ったとき、子どものころから知っていた親鸞を求めるようになった。その著書「教行信証」の解説書を読み始めたが、難解で分からない。仏教講演会に参加しても僧侶から納得のいく答えは得られなかった。分厚い本を擦り切れるまで読み返すしかなかった。心の支えがつかめてきた。

「医学は治療が効果を挙げて長く生きれば勝利だが、死は敗北。人の生死に優劣をつける。だが阿弥陀仏の世界はまったく逆。命をそんな色眼鏡では見ない、大きな慈悲がある」

「優劣を越えた世界」を知ったという喜び。医療への見方も変わった。目を地域に向けるようになった。九一年、小児科医のいなかった備前市に開業。年に五日しか休まなかった勤務医の生活に区切りを付けた。

午後の診察は主に、広島大医学部を出て同じ小児科医の道を選んだ長男にまかせ、自分は毎日午後七時から九時まで夜間救急外来を担当する。「岡山県内の小児科診療所で夜間外来を開いているのはここだけでしょうね」

備前市から岡山市まで車で約一時間。「夜でもすぐに診てくれるので助かります、というお母さんたちの声に励まされています」とほほ笑んだ。

（串信考）

月1回掲載します

「親鸞を求めて、医師として生きていく道が見つかった」と話す駒沢さん
（備前市のこまざわ小児科）

浄土真宗の教え 広島の僧侶解説

「見えない今―」刊行

中国新聞文化センターで「わかりやすい仏教講座」の講師を務める森重一成さん(77)＝写真・浄土真宗本願寺派養専寺（広島市安佐北区）住職＝が、書き下ろし「見えない今 見える明日」（探究社）を刊行した。

五章で構成。第三章の「お浄土について考える」では、死後、浄土があるかどうかを実証することは不可能であり、この問題を解く鍵は「阿弥陀さまの側に立って考えてみ

道しるべ

◇明窓友の会例会　7日